

フィリップ・K・ディックの『高い城の男』における 個人の意思と諷刺の様態

— チルダン氏と田上氏を中心に —

山内 曉彦

序

フィリップ・K・ディック (Phillip K. Dick) の小説『高い城の男』(*The Man in the High Castle*) は架空の歴史を扱った、20世紀のアメリカのSFである。作中の世界では、日本とドイツが第二次世界大戦に勝利し、アメリカは両国の統治下にあることになっている。ロッキー山脈の中立地帯を挟んで、アメリカの東の半分はドイツに占領されており、西海岸は日本の支配下にあるP S A (Pacific States of America) となっている。ここでは、白人たちは、社会的、文化的に日本人の下位におかれており、主な登場人物たちはいずれも困難な状況下で生活している。これは一種のディストピア小説なのである。とりわけ古物商のチルダン氏 (Mr Childan) は、取引相手の日本人に自分たちの新しい芸術作品の価値をないがしろにされ、こう思う。“Humiliated me and my race. And I’m helpless. There’s no avenging this; we are defeated . . .” (Ch. 11, 177) 「やつは私を侮辱し、わが民族を侮蔑した。だが、私にはどうにもできない。仕返しの手はない。私たちは敗れたのだ。」¹ 一方、工芸作家フランク・フリンク (Frank Frink) は、ユダヤ人であることをドイツの同盟国である日本の官憲から隠しながら生きている。もし自分がユダヤ人であることが知れたらドイツに送られ生命の危険に晒されるのだ。本作のヒロイン、フランクの元の妻ジュリアナ (Juliana) は、「高い城」(The High Castle) に住む、地下出版物である小説『イナゴ身重く横たわる』(*The Grasshopper Lies Heavy*) の著者、ホーソーン・アベンゼン (Hawthorne Abendsen) を亡き者にしようとする、ナチの暗殺者の共犯者にされそうになる。困難を抱えているのは被支配層のアメリカ人たちだけではない。日本人の通商代表の高官、田上氏 (Mr Tagomi) は、ドイツ首相ボルマンの死を契機に、ドイツ国内では権力闘争が渦巻き、加えて祖国を壊滅させる「タンポポ作戦」が進行中であることを知り苦悩する。²

このように、この小説は群像劇の形態を持っており、登場人物たちはそれぞれが、様々な人生の局面で困難に立ち向かい、ある時には「易経」の助けを借りながら、ある時には自分の信念に基づいて行動し、新たな人生の局面を切り開いていくのだ。チルダンには日本人に謝罪を求めるし、田上氏は拳銃を手に暗殺者に立ち向かうのである。本論では、作中の主な人物であるチルダン氏と田上氏に焦点を当て、人間としての弱さと強さが作品でいかに描かれているかを考察する。さらに、現実の世界の読者として我々がこの作品に描かれた架空の歴史や出来事に接した際に、いかに反応することになるか、諷刺の観点から解明する。その際、我々が想定する読者は、アメリカ人やドイツ人など、作品の登場人物たちが関係する各国の読者をも含めるが、主な考察の対象とするのは筆者を含めた我々日本人読者ということになるであろう。考察の対象とする作品は、英語版の原作とともに、日本語訳も同等に扱うこととし、訳出の上での問題点にも言及したい。また、最近 Amazon によって映像化されたテレビシリーズにも触れ、原作との相違や、優劣についても指摘したい。

I

Amazon のテレビシリーズ版『高い城の男』は、エーデルワイスの曲が流れる、冒頭のタイトルの演出が素晴らしいばかりでなく、登場人物のキャスティングにも目を見張るものがある。³ 本論で主に扱うチルダン氏と田上氏も、ドラマでは、原作に描かれた人物像を、容姿だけでなく言動の面でも見事に演じている。但し、原作にない、ドラマオリジナルの人物については評価が分かれるのではないだろうか。例えば、ナチス親衛隊の上級大将ジョン・スミス (Obergruppenführer John Smith) は立派な演技だが、憲兵隊の木戸警部 (Inspector Kido) は、日本人から見てミスキャストであると言わざるを得ない。ビデオは、登場人物だけでなく、プロットの面でも大幅に改変ないし拡大がなされていて、もはや別の作品であると言っても過言ではないが、人物の容姿や立居振舞い、主要な出来事が起こる場面に対して視聴者が持つ印象は大変強烈である。小説を原作として、映像作品が別に存在する際に常に起こる問題であるが、本論の筆者もビデオからの印象から逃れるのは難しい。本論は、むしろ、ビデオによって触発された論であることを初めに表明しておきたい。

原作の『高い城の男』は小説としては、1963年にヒューゴー最優秀長編賞を受けていることもあり、従来からディックの代表作の一つとされる作品であり、日本でも、藤元登四郎の論考『『高い城の男』 — ウクロニーと「易経」』がある。この論考は、もっぱら日本語訳に基づいているようで細部に問題があるも

の、第6回日本SF評論賞選考委員特別賞に輝いたことから分かるように、非常に優れた論考である。さらに、今回のテレビシリーズ化を受けて、B. Krajewski と J. Heter の編集した *The Man in the High Castle: Subversive Reports from Another Reality* という論集も出て、『高い城の男』は、にわかには再評価されてきた感がある。⁴

では、初めにチルダン氏を見ていこう。先にも述べたように、彼は古物商として主に日本人の富裕層を相手に、細々とはあるが、その業界では確固とした地位を占めて地道に働いている。売り物は戦前のアメリカ文化の遺産の民芸品であるが、市場に出回っている模造品の多さが最近の彼の悩みの種である。一方、近ごろ、ポール梶浦 (Paul Kasoura) という日本人の行政官僚を顧客にし、上層階級に商売を広げられそうなのが楽しみな点である。⁵ 梶浦の妻ベティ (Betty) への性的な関心もあって、チルダン氏は梶浦を通じてベティにフランクが最近作った小物を贈る。アメリカの伝統的な民芸品ではなく、全く新しいコンセプトで作られた芸術的な作品である。そこで持ち上がるのが、上記の引用箇所のチルダン氏の葛藤なのであった。せっかくの贈り物は、梶浦から細君の手にわたるところか、梶浦特有の、あるいは日本人特有の仕方で、チルダン氏は追い詰められてしまう。アメリカ人が創造した、これまでになかった作品が、そのものの価値は何ら認めてもらえないばかりか、鋳型で大量生産して未開の住民のお守りとして販売するのが関の山の、無価値なものとして扱われてしまい、チルダンは、自分の意に沿わぬ形で商売をしなければならぬように追い込まれてしまうのだ。これは、被支配者に対する支配者の文化的な横暴というべきであろう。初めは堪えるチルダン氏だが、意を決して梶浦に向かってこう言う。

‘Paul, I . . . am . . . humiliated.’

The room reeled.

‘Why so, Robert?’ Tones of concern, but detached. Above involvement.

‘Paul. One moment.’ He fingered the bit of jewellery; it had become slimy with sweat. ‘I — am proud of this work. There can be no consideration of trashy good-luck charms. I reject.’ . . .

‘. . . I ask for apology.’ (Ch.11, 178)

(「ポール、わたしは……侮辱を……受けました。」

部屋がぐるぐる回り出した。

「どういことですか、ロバート？」心配そうでいて、その実よそよそしい口調。超然たる態度。

「ポール。ちょっと待ってください。」彼は装身具をつまみあげた。それは汗でぬるぬるになっていた。「わたしは — この品物に誇りがあります。それを安っぽい幸運のお守りにするなんて、考えられません。お断りします。」(中略)

「・・・謝罪を求めます。」

チルダン氏に対して梶浦は存外素直に謝罪をするのだが、結局、このやり取りは、両者の上下関係には何ら影響を及ぼさない。梶浦氏との関係が続くかどうかははっきりしないままになってしまう。おそらく彼との取引はもう沙汰済みになってしまうのだろう。では、チルダン氏のこの行為は、意味がないものだったのだろうか。否、目に見える成果はなくとも、自らの信念に従った彼の行為にこそ意味があったという解釈をしたい。人が持つべきものとしての意思の力である。ここには、本作品の多くの人物が依存している「易経」の要素はない。これはチルダン氏が自分で選び取った言動なのである。この作品には通俗的な面があり、読者を感動させる箇所はふんだんに用意されているが、上記の箇所はその最たるものと言えよう。

次に、田上氏について考えてみよう。彼はアメリカ西海岸を支配する日本人官僚の一人として、作品の冒頭から重要な役割を演じている。しばしば「易経」に頼る点も多くの人物と共通しているが、彼の抱える困難は、今や世界を分割して支配しているナチスと日本の2つの大国が、近い将来再び戦火を交え、その結果、ドイツの水爆で祖国日本が滅亡する危機にあることを察知し、言い知れぬ不安におそわれることだ。彼は太平洋岸第一通商代表団の高級官僚 (high official with the ranking Trade Mission on the Pacific Coast) であり、現地人のチルダン氏に対しても、顧客として常々高飛車な態度で接している。だが、国家間の軋轢がもたらす危機に直面した時は、心身の不調に襲われてしまい、ドイツ首相の急死を受けて開かれた重要な会議に出席していても、最後までその場に留まることができないほどだ。しかしながら、作品のクライマックスでは、大きな活躍を見せる。バイネス氏ことルドルフ・ヴェーゲナー大尉 (Captain Rudolf Wegener, alias Mr Baynes) と、谷田部氏こと手崎将軍 (General Tedeki, alias Mr Yatabe) との会見場所として提供した自分の職場にナチスの国家保安警察 (S.D.) の暴漢が押し寄せた際は、身を挺して兩人をかばい、骨董品の拳銃を発砲して敵を殲滅するのみならず、ドイツ領事に対しては自分こそが下手人であることまで表明する。老人でありながら勇気をもってことに当たるのだ。

Two burly white men appeared, both armed with pistols equipped with

silencers. They made out Mr Baynes.

‘Da ist er,’ one said. They started for Mr Baynes.

At his desk, Mr Tagomi pointed his Colt · 44 ancient collector’s item and compressed the trigger. . . . With record-eclipsing speed he fanned the hammer of the single-action Colt, firing it again and again.

The S.D. man’s jaw burst. Bits of bone, fresh, shreds of tooth, flew in the air. (Ch.12, 192)

(二人のたくましい白人が現れた。どちらもサイレンサーのついた拳銃を握っている。彼らはバイネスを見つけた。

「やつはあそこだ！」片方が言った。二人はバイネスの方へ近づこうとした。

デスクの前で、田上は骨董のコルト・四四口径を構え、引金に力を込めた。S Dの一人が床に倒れた。・・・記録破りのスピードで、田上はシングル・アクションのコルトをファンニングして撃ちまくった。

S Dのあごが破裂した。砕けた骨と、肉片と、バラバラになった歯が空中に飛散した。) ⁶

収集品である骨董の銃をわざわざ持ち出して敵を撃ったということは、おそらくこの世界でも民間の日本人には銃の携行は許されていないということであろう。いずれにせよ、田上氏は一般人としては尋常でない経験をしたことに変わりはない。一登場人物としての彼の振る舞いに関して、我々読者は共感する部分がある。田上氏の容姿は小説では十分に描かれているとは言えないが、Amazon のビデオを観れば、無口で古風な、礼儀正しい日本人像を目のあたりにすることができるだろう。先ほど、本作には感動的な場面がいくつか存在すると述べ、チルダン氏の表明の場面を例に挙げたが、これと並んで田上氏がドイツ領事のフーゴー・ライス (Hugo Reiss) から、あるユダヤ人のドイツへの引き渡しを要求された際に、田上氏が、それには応じず、逆に、「釈放せよ」との署名をする場面 (Ch.14, 230) もこれに匹敵する。この行為によって、実はフランクが一命を救われることになるのである。田上氏はフランクの存在を知らず、自分の拳銃がおそらくは彼の偽造であることも、チルダンの店で入手した小物がフランクの工房で作られたものであることも、彼のあずかり知らぬことである。田上氏は、一見すると互いに何の繋がりもなく生きているように見えるこの作品の登場人物たちを互いに関連づける、かなめの役割も実は負っているのである。

田上氏の持つ重要性はそれだけではない。この作品が歴史改変SFであって

パラレルワールドを描いているものあることを作者が明かすために、田上氏は極めて特殊な体験をすることになる。上記のような極限的な体験を経た後、作品の終わりの方で、仕事を失う恐れもあり、もはや生きる気力も失せた体の彼は、サンフランシスコの街中で、突如別世界に移動し、そこからまた戻ってくるという体験をするのである。その別世界とは、実は我々が住むこの世界であるらしい。あるいは本作中で、アベンゼンによって書かれた小説『イナゴ身重く横たわる』の中の世界だろうか。そこでは、アメリカやイギリスが、日本やドイツに勝った世界が描かれているのだ。行き先は不明だが、田上氏が時空間を移動したことは、彼の住む世界にはもともと存在しない「エンバーカデロ・フリーウェイ」(Embarcadero Freeway)を目にしたたり、普段見慣れた「輪タク」(pedecab)が全く走っていないことなどによって示される。すなわち、この作品では、田上氏だけが作中の世界から抜け出し、おそらくは我々の世界へ来たという役割を担っているのだ。このように、彼は作品の構成そのものにとっても重要な役割を担っていると言える。Amazon ビデオのシーズン1の最終話‘A Way Out’「運命を握る者」のラストシーンでも田上氏は同様の体験をする。彼の眼前に、ホットドッグのスタンドや『ロリータ』の看板といったアメリカ的なアイコンを満載した現実のサンフランシスコの街並みが突如出現し、彼も視聴者も共に驚愕させられてシーズン1全体が幕を閉じるという趣向になっている。このシーンは時間にしてわずか1分ほどだが、直前のP S Aの地味な風景から一転して派手な音楽と色彩に溢れたU S Aの描写に移る手法は、小説ではできかねる、ビデオならではのものと言えよう。

ここまで、アメリカ人のチルダン氏と日本人の田上氏を見てきた。彼らにとっては、結果は思わしくないものであったかもしれないが、それぞれが難局に立ち向かった様子を見てきた。この作品には様々なテーマが存在しているが、人生でまれに遭遇する難しい局面で、人はいかにして振舞うべきかという規範を提示することも、作者の意図にあったのではないだろうか。人は自らを信じる力を持つべきであるということである。だが、このことについて、全く逆の意見を述べている論者もいる。John V. Karavitis は、先述の論集に収められた、“Is It Free Will if You Pay for It?” の中で次のように述べている。

The novel also has the main characters accepting the futility of changing their lives, and we see this expressed most prominently in the persistent use of the *I Ching* to make decisions about the future. They are trapped *in* a novel.⁷

確かに多くの登場人物たちは、常に「易経」に頼っているように見えるし、小

説の世界からは逃れようがない者たちであるので、彼の論にも一理ある。しかしながら、「易経」に頼ろうとするのは自分自身であることと、「易経」から得られる謎めいた言葉の解釈をするのはあくまでも自分であること、その言葉の解釈がどうであれ、それを参考に、何らかの行動に出ることを選択する主体は各人物自身であること、という三つの点で、筆者は彼の意見に賛同することはできない。少なくともこの作品で用いられている「易経」は、現代のわが国で流行している、「今日のラッキー・アイテムは〇〇です」などという、底の浅い「占い」とは、全く次元が異なっている。深遠な摂理を暗示する、古来の歴史性に裏打ちされた別格の物であり、人生の転機で頼りとするに相応しいものとして確固たる地位をこの作品では与えられているのである。そればかりか「易経」は、アベンゼンの『イナゴ身重く横たわる』執筆をも、実は陰で操っていて、この小説を書いたのはアベンゼンではなく「易経」であったと言っても過言でないことになっている。それほどまでに重要な「易経」に敢えて頼らないということが、却って本人の意思を強く感じさせる結果になっているのである。

II

さらに検討してみたいことは、読者である我々日本人が上記の二人に対して持つ感情がいかなるものであるかという点である。アメリカ人のチルダン氏は日本人のポール梶浦にないがしろにされるが、チルダン氏が日本人に対して持つ感情の描き方には、日本人に対する作者ディックの諷刺の意図が見え隠れしている。あるいは、日本人全体に対し、作者のディックも含む大方の欧米人が持っているイメージが投影されている、と言い換えても良いだろう。例えば、日本人の義務に対する観念がいかなるものかについて、チルダン氏が持っている考え方は以下のようなものである。

They're out of their minds, Childan said to himself. Example: they won't help a hurt man up from the gutter due to the obligation it imposes. What do you call that? I say that's typical; just what you'd expect from a race that when told to duplicate a British destroyer managed even to copy the patches on the boiler as well as — (Ch. 11, 173)

(この連中は頭がどうかしてる、とチルダンは内心でひとりごちた。例えば、奴らは義務がそう命じれば、怪我人をドブから引き上げることもしない。そういうのは、何と名づけりゃいいんだ？ 俺に言わせるなら、それこそ典型的だ。何しろ、イギリスの駆逐艦の模造品を作れと命じら

れて、ボイラーの継当てまでそのまま写し取った民族だものな —)

彼の感想の基本には、日本人の模倣の才能に対してしばしば投げかけられる、差別的な意識が存在する。チルダン氏は、ポール梶浦や妻のベティとの会食の場で、日本人の借り物の文化について「どこまで行ってもそれは模倣でしかない」(‘... it’s ersatz as the day is long.’) ことをすでに見抜いている (Ch.7, 112)。そもそも、「ポール」や「ベティ」という彼らの名前からして模倣であるし、ベティ自身も、アメリカ料理を「本物らしく作ろうとベストを尽くした」(‘Doing my best to be authentic’) と言ってはばからない (Ch.7, 113)。本物か偽物か、というテーマはディックの多くの作品に共通する、大きな問題意識、あるいはテーマの一つとしてしばしば言及されるが、これは本作品にもこのように分かりやすい形で現れている。真似することが本当に価値のないことかどうかは別として、以上のような、チルダン氏によって述べられた日本人に対する諷刺的な評価は極めて典型的なものである。従って、日本人読者としてこのような諷刺に接した場合は、それが大変見慣れたステレオタイプであることから、特に深く動揺したり不愉快に感じたりしない者も多いだろう。それよりはむしろ、我々日本人ならば確かにしそうな行為であることを認めつつ、言及されている駆逐艦の艦名や、建造の年代などに対する興味関心の方が先に立つような者もいるのではないだろうか。作品を全体として見た場合も、日本人読者にとっては、日本や日本人に対する諷刺は比較的穏やかなものであると考えて良い。むしろ、我々にとっては、ポール梶浦や田上氏の姿を見た際、彼らの持つ心情や振る舞い方には、いわゆる日本的な特質がよく描かれているという感嘆すら覚えるであろう。さらに言えば、作品中で全くの非道な民族として描かれているドイツ人に比べて、日本人はそれほど悪く描かれていない点などに対して、我々は安堵を覚えたり、気恥ずかしさを感じたりするのではないだろうか。

日独両国民の差は、これもよくある手法であるが、ユダヤ人に対する接し方や扱い方の差異に端的に表されている。中立地帯で暮らすジュリアナが耳にした、以下のような会話を写した記述に接した際、「ジャップ」(Japs) や「イエロー」(yellow) という語句に込められた日本人に対する差別意識に対して我々が持つべき嫌悪感、ユダヤ人に対する日本人の寛容な態度についての記述で相殺されてしまう。

By degrees, the two drivers reseated themselves. The older man mumbled, ‘I always forget; they’re a little yellow out here.’

The fry cook said, ‘No Japs killed Jews, in the war or after. No Japs built

ovens.’

‘Too bad they didn’t,’ the older truck driver said. But, picking up his coffee cup, he resumed eating.

Yellow, Juliana thought. Yes, I suppose it’s true. We love the Japs out here.
(Ch. 3, 39)

(少しづつ二人の運転手は緊張を解いて、もう一度腰を下ろした。年上の方がつぶやくようにいった。「いつも忘れちゃっていけねえ。この辺の連中はちよっぴりイエローなんだよな」

チャーリーが言った。「ジャップはユダヤ人を殺さなかったぜ、戦中も戦後もな。ガス室も作らなかったしな」

「作りゃよかったのによ」年上の運転手はそうつぶくと、コーヒーカップをもちあげて、食事に戻った。

イエロー、とジュリアナは思った。そう、確かにそうかもね。この辺じゃ日本人は好かれている。)

このように、本作においての日本とドイツは明らかに扱いが異なっている。ただしこの点に関して Darko Suvin は異なる見方をされていて、“[T]he assumption that a victorious Japanese fascism would be radically better than the German one is the major political blunder of Dick’s novel.”と述べている。⁸ もちろん、戦前の日本がどのような国家であったかを考えれば、彼の主張が根拠のないものとは言えない。もし、ディックが日本をドイツと同等の非道さで描いていたとしたら、それは全く異なる作品になったはずであり、それはそれで一興だろう。一方、我々としては現にある『高い城の男』をそのままの形で受け入れるしかないことも確かである。登場人物として様々な国民ないし民族を配したこの作品は、見方によっては、国家が登場人物だともみなせるだろう。

さて、この作品をいかに読むかについてさらに考えてみたい。もとよりこの作品は、直接的にはアメリカの読者に向けて書かれたものである。ひいては世界の読者に向けて書かれたものでもある。従って、我々日本人の視点からだけでその中の諷刺なりテーマなりを解釈することは、作品評価の方法としては一面的に過ぎることになる。例えば、ドイツ人が上記の引用箇所を読んだ際には、現実の世界のみならず、小説の中でもまた自分たちの犯した消し難い罪悪が再び指摘されて、作品そのものに対して彼らは嫌悪感や不快感を持つかもしれない。あるいは、もう平気と感じるのだろうか。当然ながら、同じドイツ人と言っても個人差はあるから一概には言えないにせよ、世界の様々な国民ないし民族がそれぞれに、他とは異なる、自分たち特有の反応をしてしかるべきである

う。さらには、『高い城の男』は、作品全体の大枠の設定として、現実とは全く異なる架空の歴史を枠組みとして持つ特殊な作品でもある。従って、諷刺の方向性をどう解釈するかという問題についても、当然ながら、各国の読者によって大きく異なってくるのだ。ディック自身はこの問題に関して以下のように述べている。「ドイツ人Ⅰはドイツ人Ⅱじゃないし、ドイツ人Ⅱはドイツ人Ⅲじゃない。そんなところ」と。⁹ ディックらしい、個人を尊重した理想的な考え方であるが、現実には、我々は国家単位、国民単位で捉えられてしまいがちなのも事実である。本論でも当面、国家単位、国民単位で議論を進めざるを得ない。

ではここで、改めて図式的にまとめておこう。『高い城の男』の中で描かれた世界では、日本とドイツが戦勝国としてアメリカを二分して占領し、さらには2つの超大国として世界をもほぼ二分して支配している。作中で諷刺が行われているとすれば、その対象は、戦勝国である日本やドイツ、あるいは日本人やドイツ人が諷刺の矢面に立たされているということである。場合によっては、同じ戦勝国であることになっているイタリアやイタリア人ということになるだろう。さらに、複雑なことに、この作品には入れ籠の構造を持っていて、架空の世界の中の架空の世界とも言うべき、別の世界が設定されていた。中立地帯にある「高い城」に籠るアベンゼンによって執筆された『イナゴ身重く横たわる』という題名の小説がここには存在しており、その中で描かれた世界が別にあると考えられるのだ。¹⁰ この本はドイツ占領地帯では発禁になっているにも関わらず、その他の地域ではベストセラーになっていて、登場人物たちは皆、これを読んでいたり、これから読もうとしていたりする。『イナゴ』の中の世界では、アメリカとイギリスが、日本やドイツに勝った世界ということになっているが、これは、アメリカとソ連が日本やドイツに勝った我々の現実の世界と「ほぼ」同じである。

以上のことをまとめると、作中の架空の世界においては、戦勝国は、日本・ドイツ。敗戦国は、アメリカである。ここでは、日本人諷刺やドイツ人諷刺が遂行されている。この架空の世界の中の架空の世界、すなわち『イナゴ』で描かれた世界では、状況はこの逆である。戦勝国は、アメリカ・イギリスであり、敗戦国は、日本・ドイツだ。これは、我々の現実の世界とよく似てはいる。しかし、同時に、異なっている点も多々見受けられる。敗戦国が、日本・ドイツであるのは史実と同じだが、連合国側の戦勝国としてソ連の存在感が希薄になっているし、米英両国が戦争に勝つ経緯や、その後の覇権争いとその結果なども、現実と同じではない点には注意を要する。このように複雑な設定が施されているために、読者個人が属する国や民族の差異が、作品の読み方に大きく影響することになるのは当然である。例えば、先に言及した Suvin は、旧ユーゴ

スラビア生まれのユダヤ人で、カナダに移った人物であり、他の誰とも異なる経歴を持っている。彼が上記のような独自の解釈をすることは当然であるということになるのである。諷刺の対象が国家や国民という大きな単位であるとも、諷刺の解釈は個人的な背景が大きく影響することになるのである。

諷刺の対象を国家や国民と大きく捉えながら、作品をさらによく読んでみたい。『高い城の男』という架空の世界の中では日本人諷刺やドイツ人諷刺が遂行されているとすれば、さらにその中にある架空の世界である『イナゴ』で描かれた世界では、諷刺の構造はどうなっているかが次の問題になる。『高い城の男』の中で、戦勝国である日本やドイツが諷刺の矢面に立たされているのと同様に、『イナゴ』の中では、戦勝国民であるアメリカ人やイギリス人に対する諷刺が行われている、と考えて良いのだろうか。それともことはそう簡単ではないのだろうか。そもそも『イナゴ』の内容自体は、作品の中では断片的にしか紹介されていないため、あくまでも推測の域を出ないのであるが、可能な範囲で考察してみたい。¹¹

先に述べたように、『イナゴ』は我々の住む現実の世界と同一であるかといえど決してそうではない。作者ディックは、現実の歴史上の推移を大きくなぞるように新たな歴史を形成してはいるものの、様々な改変を施して、別の世界を創造していると考えの方が自然である。『イナゴ』の中で歴史が改変されている箇所特に目を引くのが、英国のチャーチル首相の存在感である。彼は、アメリカと協力してドイツや日本との戦争に勝利しただけでなく、戦後も長く生き続けて政権を維持し、独裁的な手腕を発揮してアメリカと世界を二分するに至ることになっている。さらには、アメリカとの覇権争いにも勝利して、世界をほとんど我が物にしてしまうのである。このことは、『イナゴ』の熱心な読者の一人でもある、ナチスの暗殺者ジョー・チナデーラ (Joe Chinnadella) によって簡潔に述べられている。

‘Britain wins,’ Joe said, indicating the book. ‘I save you the trouble. U.S. dwindles, Britain keeps needling and poking and expanding, keeps the initiative. So put it away.’ (Ch. 10, 159)

(「イギリスが勝つよ」ジョーは本を指差して言った。「読む手間を省いてやろう。アメリカはじり貧。イギリスはちくちく挑発したり、小突いたり、領土を広げたりして、いつも主導権を握っていく。だからもうその本はしまっちゃいな」)

ジョーは自分をイタリア移民であると偽っているが、その実体は、スイス生ま

れのナチのSDであり、「高い城」を訪れ、アベンゼンを暗殺することを企てている、全く信用できない人物であり、彼の言動自体が怪しいものだ。だが、ここで彼が『イナゴ』の内容についてジュリアナに嘘をつく理由はないようなので、一旦、彼の言葉を信用することにするのだが、イギリスがアメリカと争い、最後には勝つ、という設定自体がかなり目新しいものである。我々の住む現実の世界では、イギリスとアメリカは最も近い同盟国であるとみなされているからだ。もちろん、日本やドイツが第二次世界大戦に勝つという、作品自体の基本的な設定に比べれば、我々の驚きは小さいが、チャーチルの独裁といい、イギリスの覇権といい、歴史が改変された箇所の中には作者ディックの意図が感じられる。『イナゴ』の中の印象深い一節、敗戦間際のベルリンで戦火に翻弄される子供の視点で描かれた箇所を読めば、ことの真相が見えてくるだろう。

... Had he actually walked streets of quiet cars, Sunday morning peace of the Tiergarten, so far away? ... God, he cried out. Won't they stop? The huge British tanks came on. Another building, it might have been an apartment house, or a store, a school or office; he could not tell — the ruins toppled, slid into fragments. (Ch. 8, 123-24)

(・・・静かに車の行き来する通りを歩いたのは本当のことだったのか、日曜の朝の平和なティーアガルテンは遠くに行ってしまったのか?・・・ちくしょう、と少年は思った。いつになったらやめてくれるんだ? 巨大なイギリス軍の戦車がやってきた。また一つの建物、昔はアパートか店だったか、それとも学校かオフィスか、彼には分からなかったが — その廃墟が押し倒され、バラバラになって崩れ落ちた。)

周知のように史実では、首都ベルリンに突入したのは、英米の連合軍ではなくソ連軍であった。『イナゴ』で描かれた世界では、ソ連がイギリスに置き換えられていると考えるのが自然である。戦争中の状況だけでなく、戦後の状況も、現実の世界の米ソの対立が、米英の対立に置き換えられているのだ。こう考えれば、独裁者然としたチャーチルも、スターリンやフルシチョフ、ブレジネフなどの、長期政権を維持したソ連の指導者たちのいずれかが置き換えられたものと考えることができるのである。

『高い城の男』が執筆されたのは1961年、発表されたのは1962年であるが、当時のソ連書記長は、1953年からその座にあり、すでに10年になろうというフルシチョフであった。従って、チャーチルは、直接的にはフルシチョフを指すものと考えてよからう。あるいは、スターリンではどうだろうか。スターリ

ンは、さらに長期政権を維持していて、就任は 1922 年であり、1953 年に退任するまで、異常とも言える 30 年の長きにわたって党と国家に君臨し、様々な悲劇をロシア人のみならず周辺の各民族に与えたことで悪名高い。チャーチルはスターリンのことであると言っても良いだろう。このようにして、人物を置き換えて考えてみることで、色々な可能性が表面に現れてくる。諷刺は元来、直接的な解釈から間接的な解釈まで多様な解釈が可能であるが、諷刺の対象が何であるかについては、読者は常に注意を払わねばならない。諷刺の対象が何であるかについて考える際、それらが同時代のものである必要はない。現代の事柄に当てはめて考えても良いし、時代を遡って過去の事柄に当てはめても良いことになる。ひいては、異なる文化圏にまで対象を拡大することもできる。もちろん限度はあるが、諷刺の普遍性という点では、この『高い城の男』という作品に関する限り、読者の解釈の自由度はかなり高いと言えるだろう。作品に込められた諷刺の対象が何であるかに関して、解釈の幅を広く取り、他の状況や人物に適用することができるのである。

作者の側から考えてみると、ディックは、チャーチルをチャーチル個人として揶揄しつつ、フルシチョフやスターリンなどの同時代の独裁的な国家元首、並びに彼の支配するソ連という国家を読者に想起させるような仕掛けを施していると言っても良い。仮に、『高い城の男』が『イナゴ』を内包していなかったなら、解釈の幅もかなり限定的なものになってしまったであろう。我々の住む現実の世界の中に『高い城の男』という作品があり、さらにその中に別の『イナゴ』の世界があることで、世界の重層性が増している訳であるが、この三層構造こそが本作品の特殊性を担っている。先に述べたように、『イナゴ』の世界は現実の世界とはかなり異なっているが、書き方によっては、現実の世界と同一の設定にすることも可能であったろう。しかし、ディックはそうはせず、『イナゴ』の世界を現実の世界とは似て非なるものとして創造している。そのことで、三つの層がそれぞれの存在を主張することができることになった点も重要である。

III

最後にチルダン氏と田上氏について再び考えてみよう。先に見たように、チルダン氏は作中では被支配階級のアメリカ人として、苦しい立場をものともせず、支配階級のポール梶浦に自分の主張をすることができた。彼の言動は賞賛に値するものであるだろう。だが、この考え方は、本論の筆者の日本人としての視点に囚われたものである恐れが多分にある。読者の立場によっては彼の言

動を全く異なる見方で解釈することも可能であるのではないだろうか。仮に、読者がアメリカ人であったらどうだろうか。一口にアメリカ人といっても千差万別であり、一概に言えない。白人、黒人、ヒスパニック、東洋系の移民から先住民に至るまで、まさに千差万別だ。アメリカ人Ⅰはアメリカ人Ⅱではないし、アメリカ人ⅡはアメリカⅢではないという以前の問題である。そこで、議論を簡略化するために、ここではチルダン氏と同じ白人読者を想定してみよう。例えば、下記のような箇所を読んだ際の彼らの感想や反応はいかなるものだろうか。

Robert Childan felt his face flush, and he bent over his new drink to conceal himself from the eyes of his host. What a dreadful beginning he had made. In a foolish and loud manner he had argued politics . . . They're so graceful and polite. And I — the white barbarian. It is true. (Ch.7, 108)

(ロバート・チルダンはぱつと顔が赫らむのを感じ、新しくそそがれたばかりのグラスの上に背をかがめて、この家のあるじから顔を隠した。最初から何とひどい失態を演じたもんだろう。大声で政治を論じるという、ばかなまねをやらかしてしまった。・・・彼らはとても上品で礼儀正しい。それにひきかえ、私は — 白い野蛮人だ。間違いなく。)

チルダン氏は、精神的な面、文化的な面での劣等感を持つだけではない。日本人女性の美しさを目の当たりにすることによって、身体的な差異の面でも彼の内面は傷つけられてしまうことになる。

Betty, having returned from the kitchen, had once more seated herself on the carpet. How attractive, Robert Childan thought again. The slender body. Their figures are so superior; not fat, not bulbous. . . . Lovely dark colours of her skin, hair, and eyes. We are half-baked compared to them. Allowed out of the kiln before we were fully done. The old aboriginal myth; the truth, there. (Ch.7, 108-09)

(キッチンから戻ってきたベティがカーペットの上に坐り直した。何と魅力的なんだろう、とロバート・チルダンはあらためて思った。このほっそりした体。日本女性のスタイルは全く素晴らしい。ぶよぶよした贅肉ってやつがない。・・・浅黒くきめの細かい肌、黒い髪、黒い瞳。これに比べたら、我々は生焼けだ。すっかり焼き上がらないうちに窯から取り

出されたんだ。あの先住民の神話、あれは真実をついている。)

このように自らと自らの民族を卑下するチルダン氏の姿には、白人の読者たちはかなりの嫌悪感や不快感を持って接するのではないだろうか。ここで、諷刺が標的としている対象を別のものに置き換えてみよう。「私は白い野蛮人 (the white barbarian) だ」を「黄色い野蛮人 (the yellow barbarian)」と言い換えてみるということだ。そうすることで、自ら卑下するチルダンの心情がいかに切実なものであったかが、我々にとって、より鮮明になるだろう。また、このような差別的な表現自体が 1960 年頃の 20 世紀半ばには可能であったにせよ、21 世紀の現代においてはほとんど全くありえない言説であることにも気づかされる。抑圧された中でチルダン氏が、自分の意思を表明した点は賞賛すべきであると述べたが、この判断は、我々が日本人の読者であって、白人の読者ではないことも大きく影響している。諷刺は、読む者の立場の違いによって、もたらされる効果が微妙に異なってくるということが、このような例でも歴然としている。

ただし、チルダン氏は、様々な面で自分を卑下していたところから一転して、自分の意思を明確に表明するに至った訳で、もし仮に、最初から日本人の支配層の人々と対等の関係にあると彼が考え行動していたのであれば、梶浦と対峙した際の彼の言動も含む物語の展開もまた違ったものになったであろう。こうしたことから考えて、衝撃的な「白い野蛮人」という言葉を自ら述べたこと自体に、彼のその後の行為を引き立たせる効果が、当初から込められていた、と考えることもできる。また、近代の歴史を通じて白人優位の世界が形作られてきたという歴史的背景を合わせて考えてみた際に、作品の大筋で、アメリカの西半分が日本に支配されているという図式と、チルダン氏の中にある〈白人＝野蛮人〉の図式とは、何ら抵抗なく合致しているため、チルダン氏の感情自体は、作品を全体として見た場合、何の違和感も読者に与えないことになる。むしろ、作品の読者がどう感じるかということが問題視されるべきであろう。白人読者が嫌悪感を持つのと反比例して、白人以外の読者が快哉を叫ぶ、という状況すら想定しうるのである。『高い城の男』に描かれた世界がディストピアであるとすれば、その程度もまた読者によって異なるのである。

一方の田上氏についてはどうだろうか。彼の場合は、チルダン氏と比べて事情はかなり異なっている。チルダン氏が対峙したのは日本人のポール梶浦であったのに対し、田上氏が対決したのはナチスドイツの SD の暴漢とドイツ領事のライス男爵だった。チルダン氏はアメリカ人であり我々日本人読者とは異なっているが、一方、田上氏は我々と同じ日本人である。本論の冒頭で触れた、チルダン氏がポール梶浦に対して放った「謝罪を求めます」という言動を我々

が読んだ場合と、田上氏が拳銃を撃ったり、書類に「釈放せよ」と記入して突きかえしたりする場面を読んだ場合とでは、印象が全く異なるのは当然である。我々は、作品をいかに客観的に読もうとしても、日本人読者であるという現実からは逃れられないのだ。我々は、田上氏とは同一化しやすいが、チルダン氏とは距離感がある。逆に、ポール梶浦やその妻には、親近感を抱いてしまいがちだ。先に、『高い城の男』は、直接的にはアメリカ人読者に向けて、ひいては世界の読者に向けて書かれた、という趣旨のことを述べた。だからこそ、受け取り手によっては読み方自体が大きく変化してしまうことになる。執筆の際にディック本人は日本人読者の反応を随分気にしていたと伝えられている。¹² だが、作者のそうした配慮の有無とは関わりなく、『高い城の男』は、諷刺の形態に関して、読者が属す国や民族の違いによって解釈が随分変わってくる恐れがある。これを逆に考えれば、世界の多くの国民や民族の違いによる解釈の幅が大きいとも言えるのであって、大局的に見れば『高い城の男』は多種多様な読み方が可能な作品になっているとも言えるのである。

結び

本論では、ディックの『高い城の男』について、主な登場人物であるアメリカ人のチルダン氏と日本人の田上氏を中心に考察し、論の前半では、苦境を切り抜ける個人の意思の働きの持つ積極的な価値について考察した。その際に着目したのは、彼らが重大な判断を「易経」に頼らずになしたという点であった。これは、そもそもこの作品や、作品中の作品というべき『イナゴ』では、「易経」は大きな力を振るっていることから、逆に浮かび上がった判断である。後半では、諷刺として作品を捉えた場合の、各国の読者の差異によってどう解釈が変わりうるかについて概観した。我々日本人読者は、世界が日本とドイツによって支配されているという基本設定の中で、日本人の下位に置かれたアメリカ人のチルダン氏を取り巻く状況に接した場合と、支配階級である日本人の田上氏を見た場合とで、両者が同じように困難に立ち向かう様が描かれた場合にも、異なる解釈をせざるを得ないことが確認できた。

この作品は、その中に包含された『イナゴ』の世界も含めて、史実と異なる架空の現実の中での、個人間と国家間の支配・被支配、対立や抗争がテーマであることから、読解の際にも、個人のレベルと並んで、国家や民族の違いに注目せざるを得ない面があることが明らかとなった。その際も、例えば、日本とドイツとの描き分けが意図的に行われていたり、ソ連がイギリスに置き換えられていたり、登場人物を個人として考える際も、当該の人物が属す国を単位

とした扱いをして、諷刺がいかに機能しているかを見た。また、読者を論ずる際にも、個人の差よりは、所属する国や民族の差に還元して考察をしてきた。これは、単純化のそしりを免れない面がある。本論でも触れたが、実際には国の違いと同様に、個人の違いも大きな比重を占めるはずである。日本人Ⅰは日本人Ⅱではないし、日本人Ⅱは日本人Ⅲではないからだ。だが、第二次世界大戦の勝者と敗者を逆転するという、作品の基本的な設定が衝撃的であるのみならず、我々日本人という民族や日本という国家が題材にされていることから、これは我々の取らざるを得ない手法であったと考える。作品そのものが批評の方針を前もって規定していたとも言えるだろう。その意味では、今後も我々日本人にとって、またおそらくドイツ人やアメリカ人、場合によってはロシア人やイギリス人にとって、そして特に、本論では十分に扱えなかったユダヤ人にとっても、この作品の存在は意味を持ち続けるであろう。これは、ひいては、世界の読者にとって存在意義を持ち続けるであろう、ということに他ならない。

註

- 1 フィリップ・K・ディック『高い城の男』第11章、241頁。テキストは Phillip K. Dick, *The Man in the High Castle* (Penguin/Random House, 2015) を用い、以下の引用は、本文中の括弧内に、章、頁数の順に記す。翻訳は、川口正吉訳『高い城の男』（東京：早川書房、1965年）、浅倉久志訳『高い城の男』（東京：早川書房、2016年）を参考にした。
- 2 「田上」の原綴は 'Tagami' ではなく 'Tagomi' であるが、'Tagomi' の 'go' の部分は、短く「ガ」と読めるので、本論では浅倉久志の訳に従い「田上」と表記する。日本人らしく見えないのであるが、川口訳のように「タゴミ」とカナ表記する方法もある。『高い城の男』全体を通じて日本人の氏名の原作及び翻訳での表記には色々な問題がある。あるいは、彼らは日本人のようであるが厳密にはそうではないという可能性も否定できない。
- 3 Amazon の『高い城の男』は、シーズン1が2015年、シーズン2が2016年に制作された。日本での配信は、原語版、字幕版共に、シーズン1が2016年、シーズン2が2017年である。
- 4 藤元登四郎『「高い城の男」— ウクロニーと「易経」』254頁に、ジュリアナの説明として、「彼女は自分を罰するためにカミソリの刃をのみ込み、残りのカミソリの刃でジョーの頸動脈を切った。」とあるが、正しくは「彼女は自分を罰するためにカミソリの刃をのみ込んだ自分を想像し、云々」で

- ある。原作の関連箇所は、‘Blade, she thought. I swallowed it; now cuts my loins for ever. Punishment.’ (204) となっている。もし彼女が本当に刃を飲み込んでいたら、「高い城」に行けないどころか、自分の命が危ないはずである。
- 5 ‘Kasoura’ という表記からは、「梶浦」という漢字は思い浮かびにくい。「笠浦」、「粕浦」などとする 것도可能であるし、川口訳のようにカナ表記で「カスーラ」とする方法もある。なお、‘Kasoura’ という地名が西アフリカのニジェールにあるが、これとの関連は未詳である。
 - 6 原文の ‘Da ist er.’ はドイツ語であるが、訳ではルビを振った。多少聞きなれない国家保安警察 (S.D.) とは ‘the Sicherheitsdienst’ の略で、有名な Gestapo に代わる組織であるということになっている。この作品にはドイツ語が頻出するだけでなく、‘Harusame ni . . .’ の俳句の日本語 (Ch. 3, 48)、「易経」の説明で用いられる、‘Ch’ien’, ‘Tai’, ‘Ta Ch’u’ といった中国語 (Ch. 4, 53) から、フランクが口にする ‘Oy gewalt!’ といったイディッシュ語 (Ch. 4, 54) に至るまで、多くの言語で表記がされている。翻訳の際にはそれらの扱い方に相応の工夫が必要であるだけでなく、英語圏の読者にとってもこうした多言語の作品がどう受け入れられたかは興味深い問題である。
 - 7 John V. Karavitis, “Is It Free Will if You Pay for It,” *The Man in the High Castle and Philosophy*, ed. Bruce Krajewski and Josua Heter (Chicago: Open Court, 2017), p. 90.
 - 8 Darko Suvin, “Artifice as Refuge and World View: Philip K. Dick’s Foci,” *Philip K. Dick, Writers of the 21st Century Series*, ed. M.H. Greenberg and J.D. Olander (New York: Taplinger, 1983), p. 76.
 - 9 フィリップ・K・ディック、阿部秀典訳「ナチズムと『高い城』『ユリイカ1月号』(東京: 青土社、1991年)、188頁。
 - 10 Amazon ビデオの『高い城の男』では『イナゴ身重く横たわる』は本ではなく映画のフィルムである。小説の中に本があるのと、ビデオの中にフィルムがあるのは、一見パラレルな状況に見えるが、フィルムには人物や事件が「映っている」点が大きく異なる。本は作者が個人で執筆が可能だが、フィルムの制作には、被写体、撮影者、機材なども必要である。以下では作品名を『イナゴ』と略記する。
 - 11 作品の内部に他の作品を断片的に含む手法は、ディックの常套手段の一つであろう。後期の作品『ヴァリス』(VALIS) には、独自の宗教思想を体現した「釈義」(*The Exegesis*) なるものが多大な意味を担って各所に引用されており、小説の地の文と「釈義」の両者が共鳴し融合して、一つの『ヴァリス』という作品を構成していると考えられる。

12 藤元登四郎 『高い城の男』 — ウクロニーと「易経」 244-45 頁参照。

参考文献

- Dick, Phillip K. *The Man in the High Castle*. Penguin/Random House, 2015.
- Karavitis, John V. “Is It Free Will if You Pay for It.” *The Man in the High Castle and Philosophy*. Ed. Bruce Krajewski and Josua Heter. Chicago: Open Court, 2017.
- Suvin, Darko. “Artifice as Refuge and World View: Philip K. Dick’s Foci.” *Philip K. Dick. Writers of the 21st Century Series*. Ed. M.H. Greenberg and J.D. Olander. New York: Taplinger, 1983.
- ディック、川口正吉訳 『高い城の男』 東京：早川書房、1965年。
- 、浅倉久志訳 『高い城の男』 東京：早川書房、2016年。
- 、阿部秀典訳 「ナチズムと『高い城』」 『ユリイカ 1月号』 東京：青土社、1991年。
- 藤元登四郎 『『高い城の男』 — ウクロニーと「易経」』 『S-Fマガジン 7月号』 東京：早川書房、2011年。